

昭和四十四年六月二十五日 第三種郵便物認可
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第三〇一号）

慈

光

第二十六卷

第六号

次

一 仏 名 号……………近角常観……………(1)

母 性 の 覚 醒……………福島政雄……………(8)

病 青 年 と 語 る……………佐藤強三郎……………(11)

念 仏 詩 抄……………木村無相……………(16)

ただ念仏のたのもしさ……………花田正夫……………(19)

と も し び……………聚 墨 生……………(24)

釈尊一代の間において種々無量に説き給うた法門のその帰結点は那辺（なへん）にありやと云えば、唯一の仏陀を説くが一代仏教の根底である。釈尊一代の仏教広しといえども、これを釈尊の手前で一括して云えば、南無仏、南無法、南無僧というこの三宝に南無帰依するが仏教の最始であり、又最終である。而してこの三宝というもまた結局は仏宝の一つで尽くすのである。

さてその仏宝を広く説くときは窮まりないことである。先ず最初の華嚴經にあっては、広大無辺の仏の境界を説きその後の諸經には段々とこの仏の境界を種々無量に説きひろげてある。一代經中に種々に多くの仏陀を説いてあるがそれは数多の別々のものが存在するのでなくして、結局は唯一仏に帰命するということの外はない。即ち南無阿彌陀仏という六字に帰結するのであるから、一代仏經は一仏の名号に摂し尽くすのである。

かくはじめから独断的に云ってしまえば、すこぶる一と

呑みにしたようであるが、一言でいえばこれで尽きるのである。八万の法門、数多の宗派も、結局は一つの絶対なる仏力を説くの他なしというてよい。しかし初めから独断的にこのようにいうては了解することが出来難いから、以下に段々と私共の信仰上、必ずこのようになければならぬことになるその道行きから述べて見よう。

そこで、釈尊の一代教から云わねばならぬ。そもそも我々が信仰を求め道を求めるために辿る方法は如何というに先ず自分が奮って釈尊の教法を服膺（ふくよう）して、釈尊の行い給えるように自分も行い、釈尊の証り給うように自ら証ろうとするのが自然の傾向である。このように釈尊の行履（あんり）を踏襲して進まうとするならば、それは聖道門である。正しく大聖釈尊の示された道を守って進むので実に尊いことであって、実際に神聖の道を進んで行けるならばまことに頂上であるが、一步退いて実践躬行の道を省ると、とても釈尊のように行われるものではない。

我々は釈尊の時代から遙かにおくれ、釈尊の行蹟をたずねることも難しく、且つ遺し給うた教法は高尚幽玄であって、浅聞しい我等には容易に証り難いところである。ここに仏陀の示された道は、これを実行しようとすれば一步は一步より困難で、どうしても進むことが出来ぬ。

そもそも我々自ら信仰のことに氣付いて、正しい道を行い、世を救い、人を導き、飽くまで理想的に運ばねばならぬと力んで見ても、その理想が実地には到底実現することはむづかしい。例えば、彼の忠孝にしても、中心君父の洪恩を思つて見れば、忠も孝も実践できぬのである。それなのに、世人はややもすると、臣として君后に忠ならざるべからず、子として父母に孝ならざるべからず、忠はかくかくなさざるべからず、孝はしかじかなさざるべからずと、かように「唯せねばならぬ」という意味で、これを行おうとするのは、大きな誤りである。如何に美しい忠孝といえど、かように律法的にしいてこれを行おうとすれば、恰も鉄鎖の如く苦しく感ぜられて、そのために形式的に流れて眞の意味を失うてしまふ。とかく道德問題でややりに陥りやすい点は、皆この律法主義の筋道で押しとおそうとするからである。忠孝もこうなると生命ない死物となる。今日の道德問題で特に注意すべき点である。

今、大聖釈尊の示されか道は、如何にも高尚な立派な尊

い道ではあるが、これをその示し給うように行い、戒しめ給うように守らねばならぬとしきりに策励をして「せねばならぬ」という律法主義から修行しようとすれば、終に倒れてしまわねばならぬ。たとえ外形だけでこれを守り、これを行つても、中心から教のように行い、實際釈尊のよう

に証ることが出来ねば甚だつまらぬものである。いわんや我々は朝に誓つても夕に破れ、昨日の行は今日空しくなり何事も皆駄目になる。律法的にどんなに実行しようとしても、この相對世界の事情は決してこれを許さない。到底中心から聖道門の修行を完全に成就することは出来ない、聖道門のことを難行道といわれる所以はこのためである。

しかし唯何がなしに最初から行い難い、駄目であると捨てるのではない、それでは一向意味のないことになってしまふ。聖道の修行は、これを自分が必ず行おうと企てて見て、どうしても行い得ぬことを実験したところで、はじめて意味が生じてくる。

さて、どういふ点が最後の安心であるかというに、我々は如何にしても教どおりに修行することが出来ず、如法（にょほう）に心を清うすることも能わぬ、自分は実に詰らぬものであると目醒めた最後にあらわれて来るものが絕對の仏陀の恵みである。噫、我は如何にもつまらぬものである、この如きものを捨てずして広大の恵みをそそいで下

さるは仏陀ばかりである、ああかたじけないと安心の門が開けてくる、これが念仏門であり浄土門である。仏陀を念じて仏の許に往くという道である。恰もかの忠孝も律法的にこれを行なわんとすると忠一つも、孝一つも完全に出来るものでないが、一朝、君父の恩恵に気付くときは、中心から悦服してその後の行動は知らず識らず真の道にかなうようになる。一旦律法的に倒れた者も、広大な恵みをみとめた以上は一転してくるのである。今また同様に、我が力極まって倒れたものが、忽然仏陀の偉大な恩恵に気付くときは、感謝の念仏が唇をついて溢れ出る。一仏の恵みを真に喜ぶ心持は、恰も忠臣の如く孝子の如くである。

これによって、天親菩薩が、

世尊、我れ一心に尽十方無碍光如来に帰命す

と云われた論文を曇鸞大師は註解されて、

夫れ菩薩の仏に帰する、孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰するが如く、動静おのれにあらず、出没必ず由あるが如し、恩を知りて徳に報ず、理よろしく先ず啓（けい）すべきなり。

と云うて、忠孝の文字を以て信仰を解釈せられた。この様に浄土念仏の行は自ら策勵して進むのでなく、仏陀の偉大な力よりして易く行ぜしめられるのである。そこで易行道といわれる。我等は平素、難行道易行道とか、聖道門浄土

門という名称は耳慣れていてかえってその意味を感じないが、今これを新しい言葉で云い換えると、律法主義、信仰主義と云ってよからう。この二主義をもってすれば、古今のあらゆる宗教の大問題は皆悉くこの式で解決出来る。

釈尊も修行時代には当時のバラモン教の宗義に従って、哲学をも学び苦行をも修し、色々と試られたが、到底バラモン教の律法主義では安心が出来ぬ。そこでそれらを捨ててニレンゼン河に浴して菩提樹下の金剛宝座に端坐して心中から湧き出る解脱涅槃の妙味をもって成道せられたのである。従来の律法主義を捨てて自己が信仰の妙味から説き出されたのが釈尊一代の教法である。それ以後、龍樹菩薩の難行道易行道、道綽禪師の聖道門浄土門、皆この経路がずうっと貫いてある。

広く云えば、仏教に二種あって一には聖道門、二には浄土門であると云えるけれど、もう一つこれを極端に云うならば、この二門が相対的にならび立つものでなく、聖道門はまことに尊い大聖の道であるが、それが律法的に陥ったために釈尊の真意を失うたものである。釈尊の本意は唯絶対無限の仏の恵みを説かれたので、つまり一仏名号に帰着するのである。要するに一代仏教の真髓は如来の本願である。これが親鸞聖人の腹である。聖人がこの様に極端にまで来られたのは、そこに大なる理由がある。即ち二十年来

叡山に在って試み試みて終に光を見出されなかった律法主義をすてて法然上人の言下に他力信仰に入ったのである。

そこで聖人は師の法然上人がこうされたから自分もこうせねばならぬと律法的に念仏を唱えたのではない。師上人が念仏一つになって居られるのは何の点にあるかということを含く実験的に味わられたためである。聖人の実験が全く法然上人の実験と一致である。

法然上人は九歳の時、父時国が仇のために殺されたのが動機となって仏門に入り、四十三歳に至るまで多年の間、行えるだけ行い、一切経を五遍までも読んで種々修養をせられたが、如何にしても光を見出すことが出来ず、最後に

おいて善導大師の觀經の四帖の疏を読み

一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざればこれを正定（しようじよう）の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に

という文に当って、忽然として広大な靈光に触れて大安心を得られたのである。それから上人の一代は、南無阿弥陀仏と称する一つで往生すべし、という簡単な言辞で教化せられた。この様に南無阿弥陀仏は上人においては真の光であった、上人と同じ体験をもたれた親鸞聖人はまた南無阿弥陀仏をもって真の光とせられた。よって一代仏教は如来の本願の外なく、南無阿弥陀仏の名号に帰結する、これが

仏教の真髓であると確信せられたのである。

前に云う様に仏教は初からして、南無仏南無法南無僧の念三宝である。我國の教主聖徳太子も二歳の時に南無仏と称えられたのを初めとして一代の自行化他ことに念仏を主とせられた。爾来我国には念仏の法は漸々に盛んに行われたけれども、未だ十分に念仏一法とならず、種々の行法に伴ってあった。それというのも法然上人がこれ程までに味わられた程の味が出て来なかったためである。

如何に人生何ものも頼るべきものなしと知って、一心に念仏に凝っても、広大な仏の恵みに遭わずして空しく恵の源を求めつつあるという念仏の称えようならば、真の本願の念仏でない。歴史的に云えば慈覺大師が支那の五台山に登って一行三昧の念仏を伝え来って、比叡山でしきりに念仏を称えられた。かく天台宗にも真言宗にもすでに念仏が伝わっていたが、未だ法然上人の様な絶対他力の念仏でなかった。通俗な譬えであるが、彼の石童丸が悲しみ／＼

私がかって自己の精神上に真の恵の友はないか、真の親はないか、慰めは無いか、光は無いかと日夜切に求めて泣いて泣いて涙が出ないままになっても、尚光を見出し得なかったその時の心状と同じ意味の念仏であると察する。法然上人以前の念仏は皆これである。唯ここに一つ云うべき

ことは横川の源信僧都である。僧都是一代念仏を修行なされ、其著往生要集（おうじょうようしゅう）にはその信仰をくわしく書いてあるが、一言をもってこれを云えば僧都の念仏は絶対他力の念仏である。法然上人は早くからこの往生要集を熟読遊ばしたけれど、その時分には未だ光を見出されなかったが、善導大師の観經疏の一心専念の文に當って、一心と云えば二心なく専念と云えば余事を雑えず、行住坐臥、行儀の如何によらず、時節の久近、修行の長短にかかわらず、念々不捨、常に忘るることなきはこれ極楽に往生する正定業である、これ此方より仏に向こうてかかるのでなく、仏の至誠真実の本願がある、それに従順するの他なしと気づかれ、仏陀の我等を求め給う強き念仏を見出して、ためらう暇もなく、全く仏陀救済の力強い御恵を喜ぶと同時に口を衝いて念仏が溢れ出た。これによって上人も、順彼仏願故の文心肝に徹すと自語せられた。

我々もかつては真に同情者がほしいと求めながら、いよいよもって安心が出来なかったのは、この仏願ということに気づかなかつたからであつた。漫然と聞くと仏願というは書いた個條の様に聞えるが、決してそうではない、仏陀の大悲、常に我々を眺めて居て下さる切なる念力が仏願である。石童丸がどんなに親の名を呼び呼び探し求めても、親が黙って名告りをあげないから、現に親の前に立ち乍ら

安心が出来ぬのであるが、我如来の本願はそれとちがい、親の方から求め給うところの、強い／＼意志であつて、南無阿彌陀仏という名号は親の方より名告りをあげ給う声である。これを聞くところにどうして安心が出来ないことがあるうか。

勿論、聖道を捨てて念仏を事としても、此方から向うて居るばかりでは安心が出来ぬ。人生の上に此広大の恵みが向うから来て我々を救うて下さるところで安心が出来るのである。この安心は全く仏願の賜である、南無阿彌陀仏の恵みである。そこでこの名号を称えるのは、我々の方から仏を求める声でなく、心切に胸裂けるような念仏でなしに仏の方から「汝わが名を持って、我迎えん」と喚び給う声に応ずる感謝の声である。この事は常に耳慣れている事であるが、軽々に聴き去つてはならない。

法然上人は九歳以来求めて四十三歳に及んで初めて気付かれた。勿論それまでも念仏を称えられたに違いないし、又弥陀四十八願の文を読まれたに相違ないが、未だ弥陀の本願の意を読み取られず、未だ人生に此仏願のあることを気付かれなかつた。然るに「至心信樂欲生我國、乃至十念若不生者不取正覺」（しんにしんぎょうしてわが国に生れんと欲し、ないし十念せん、もし生れずば正覺をとらじ）の本願の誓約にまかせて疑いなく念仏せられた所以

は、全く仏の親に遇われたのである。そこで上人は其著に選択本願念仏集と名をつけた。まことに上人の称うる念仏は選択本願の念仏である。徒らに口を動かし声を出す念仏でない、仏陀の手元から、他の種々の教法、無量の行業ではたすかせることの出来ぬ我等に向かつて、持戒せよとも云われず、布施等の行を勤めよとも求められず、我々に最も与え易く、最も接し易いものを選んで与えられる念仏である。選択集の題下に、

南無阿彌陀仏 往生之業 念仏為本

と標してある。これ全く上人自身の実験の披瀝である。この実験のままを表出されたのが選択集であるから、実験の道筋の痛快であるように、其著書も如何にも明快に書いてある。「聖道を捨てて浄土に帰す」と云い「難行を捨てて正行に帰す」と云い「当に知るべし隨他の前にはしばらく定散の門を開くといえども隨自の後にはかえって定散の門を閉ず、一開以後永く閉じざるものは唯これ念仏の一門」と云い「聖道門をさしおきて選んで浄土門に入れ、諸の難行をなげすんで選んで正行に帰すべし」と実に明快な言い方で、悉く実験の声である。

ここに注意すべきことは、ここが三段になつてあることである。第一は仏陀の教門八万四千であるが、その中に念仏が行じ易いという云い方である。これでは念仏というこ

とは出来ても実験の味はないのである。第二段は、念仏を律法主義にして、しきりに仏を求め仏に依らんとしてありながら、傍にまた諸行を捨てずに居る。これは捨てんとしなくても未だ大いに依るべき或る物を見出さぬから諸行がすたらぬのである。第三段に至つて、本願を信じ弊履を棄てるように全く諸行を捨てて唯一心に念仏する。この段に至らぬと眞の絶対の念仏でない。法然上人の念仏はこの最後の念仏である。

世人がややもするところ云っている。いやしくも向上の道を辿る以上は、坐禪も可、念仏も可、仏教も可、キリスト教も可、と。これは可のようでしかも実は大いにそうでないものである。信仰問題のぎりぎりは唯一でなければならぬ。その一つというのも自分がどれだけ勤めても安心がつかぬが、向うから広大の同情の恵み、即ち大悲大願の水を注がれたところで、ああ有り難いと心中に仏の恵みに気付いた一念にごろりと安心してしもうて、今までたよつて居ったところのすべてのものは何一つ用はない、世界は一仏名号を称する外に何ものもないと、一筋に恵みを喜ぶことになつては、いやでも力強く云わねば居れなくなる。捨つといい閉ざると云い攔く（さしおく）と云い、抛（なげう）つと云う様にきわどく出て来る意味がそこにある。ここが実に浄土門の開ける源泉である。こうした勢いである

から當時の人に睨まれ罵られ、迫害せられたのである。もし法然上人が聖道門も結構であると云っていられたら上人の信仰がもっとも顕われぬし、従って當時の人も仏の恵みを知らせて頂けなかったのである。然るに上人が明快に一刀両断の言動に出られたから多くの人が救済せられたのである。そして反対者から悪魔の如く見られたのである。かくまで法然上人が最も明快に唯一仏の名号を持念すること教え、其他は持戒、破戒如何様なりともそれにかかわらず唯念仏するのみで救わるべしと喝破されたのは全く上人の実験の源泉からほとばしった声である。

『親鸞聖人の信仰』より

× × × × × × ×

波岡茂輝氏遺詠

昭和六年

おのづから吾が行く道はさだまれりその一筋をゆくべかりけり

念仏の行者を一人朋に得ぬこの喜びを何にたとへむ

笑ふことも語ることもなき一人ゐに訪ひ来し友のただにうれしき

対立をにくむ人ありにくしみは対立なりと知るや知らずや

母性の覚醒

福島政雄

仏典の中に出て来る有名な女性、韋提希夫人というのがあります。これは観無量寿経に現われてまいりますし、また涅槃経にも現われてくるのであります。

この韋提希夫人というのはいかなる女性として現わし出されてあるかと申しますと、観無量寿経においては、実に愚痴な女性として現わされております。勝鬘経（しようまんぎょう）における勝鬘夫人のごとき賢夫人では決してない、実に愚痴のやまない一女性であります。自分の生んだ子の阿闍世が悪逆なことを行う。父親の頻婆沙羅王（びんばしやらおう）を獄中におしこめてしまったという時に、頻婆沙羅王を救おうとして、また阿闍世の怒りに会って、宮殿深く閉じこめられ、その中で愚痴ばかりこぼしていたという女性である。

「自分はなぜこういう子供を生んだであろう。自分の生んだ子供になぜこういうひどい者ができたのであろう」と、くり返しくり返し愚痴をこぼしていたのであります。

慈光

暗あればこそ光明の尊けれ 暗なしにして何の光ぞ
汚れたる身にしあれども浄めそそぐ水絶えざれば我はやす
けし

もう一度金も力も顧りみぬをさな兒に我を還らしめかし

人の世のいと尊きはことごとく念仏の中にありにけるかも

昭和九年

おくられし新米かしきみ仏にますきさげつつわれもいただ

く

人みな獲がてにすなる信心をわがたまはりぬ何の幸ぞも

あかあかと燃ゆる朝日にわが向ひ 偉なる力を虔み思ふ



ところがその愚痴の女性というものが釈尊の教えによって信仰に徹底するというところを説かれたのが観無量寿経であります。観無量寿経はわが国民が古い時代からよく読んでいるお経であります。その信心に徹底した韋提希夫人が今度は阿闍世が苦しみ始めた時に、黙って阿闍世を救う次第を涅槃経の中の梵行品（ぼんぎょうぼん）に物語られております。

韋提希夫人という愚痴の一女性が宗教的信仰に徹底すれば、今度は悪逆な阿闍世を黙って救うという意味はこの阿闍世が病氣になって倒れている。そういう時に決して説法がましいことをしないで、黙って病氣の阿闍世を黙々と心をこめて看護している。その母親、韋提希の真心というものは、釈尊からほとばしり出る仏陀の真心として阿闍世に徹底する。そうして黙々として看病している母親の命というものが阿闍世に響いて、阿闍世という悪逆人がよみがえってくる。心が改まって転向してくる。このところを写

してあるのが梵行品であります。

そうしますと、韋提希夫人が信心に徹底したということ
は、そこに母性に目覚めたという意味になりますが、母性
に目覚めて今度は阿闍世に対して実に包容的な忍辱（にん
にく）の母となるのであります。その母性に包容せられて
阿闍世という者が根本的に転向してくる。そうすると愚痴
の一女性が教化せられて母性に目覚めるということは、悪
逆なその子を転向させるところの教育の根本の契機となる
わけであります。そういう世界を仏典においては示してい
る。この世における賢夫人といわれる者ばかりが真実な母
性教育、母性から発する教育を行うのでない。最も愚痴な
る女性というものも、その母性に目覚めて、その尊き働き
をこの人生に及ぼし、この人生の教育教化ということを全
うして行くものであるということを、韋提希夫人というも
のに即して、その道理を開き示してあるのが、この二つの
お経に現われている物語であります。私はいつもこの二つ
の物語は味わいの深いものとして、ことに涅槃經の方など
はくりかえして読んでいるのですが、くり返して読んでい
る中に、また今まで気のつかなかったことに気がつくとい
うことになってくるのであります。

わが国の女性の実に古い時代からそういう物語を読ん
で韋提希夫人などの心に接しているわけであります。そうい

う点においてはいわゆる近代の西洋の女性というものと違
ったところを持って来ている。そしてそういう女性によっ
てわが国の国民の底力というものが黙々のうちに百年、千
年を通してはぐくまれて来たわけであります。そのとこ
ろを取り失ってはならぬ。われわれが西洋の文化に接触す
る、西洋のものを味わって見るといことはある意味にお
いて大事なことであります。しかしわが国には、わが国に
長い間養われて来たところの精神というものがある。それ
を深く味わって行くといふところがなければ、母性教育と
いうことも存外西洋人のいっているような末梢的な（まっ
しょうてき）な教育に過ぎないことになる。末梢的な教育
ということも一面において必要であります。

今日、女性教育における家事科においていろいろなこと
をさずけているということも、また女性に科学思想を養う
ということも、そういうことが必要だからであります。し
かし家事科や理科でさずけられているいろいろな細かなこ
とだけをさずけておけばよいということではなくして、その
根本は女性にひそむ母性を開くということでなければ、せ
っかく家事科や理科でさずけられたことが、その女性にお
いて生きてこないことになる。またそういう生きてこない
という弊害を私どもは今日いたるところで見るのでありま
す。

そういうことをいろいろ考え合わせますと、この母性教

育というようなことは人間として根本の問題であるとい
うことを思うのでありますが、この教育に徹底すれば、そ
ういうことがわが国の国家社会というものの、本当に底から
しつとりとはぐくみ育てられて行くゆえんとなる。それを
忘れてしまったならわが国の国家社会というものは機械化
してくる。機械化した国家社会というのは、どんなに進
んでも、それは日本のまことの国としての本義を失うとい
うことになるのであります。われわれが日本のまことの国
民として発展して行くといふことのためには、必ずこのよ
うな意味の母性の教養といふことを根本において進んで行
かなければならぬ。こういうことを痛切に考えるのであり
ます。

そういう意味で『母性讃仰記』を終始一貫して述べたつ
もりであります。述べたことはいくすじかに分かれまし
けれども、最後に落ちつくところは、最初に出立したのと
同じで、一貫した心持で述べたつもりであります。

× × × × × × × ×

『心光のあと』抄

昭和二十三年

日は暮れて道とほけれど御仏の久遠のひかりわれを照らす

も

斯の道やたれか辿りし遠しらくひかりみなぎる永劫の道
聖の道つらぬきませし親鸞の自然法爾（じねんほうに）の
みこころおもふ

昭和二十六年

まことなき身をかへりみず世に立ちてまことありげなる此
の身淋しき

み仏のまことのいのちしみじみと身にしみわたりただ念仏
する

昭和二十九年

三界に家無き身なり御仏をたのみまつりて住みうつり行く
昭和三十一年

たらちねの母のいませし遠き日をしのぶる心いまはしづけ
き

御経誦し光顔魏々の御仏に久遠の母を恋いまつるかな
世にありし母の御声をききにしと見し暁の夢のかそけき
人の世のさがしき道に老の身をむち打ちて歩む一日ひとひ
よ

御仏のとはのひかりのなかりせばさがしき道にたふれ伏さ
ましを

昭和三十三年

かへみる五十余年のたましひの辿りのあとに心光照らすも

病 青 年 と 語 る

佐 藤 強 三 郎

ある時、青年の病氣を見舞った。年は二十四、五才。その兄も若くして死んだが、その青年はもう二年位も寝ていた。その様子を家人から聞いてみると、日に日に悪くなるのが目に見えるとのこと。家でも本人には氣の毒であるが人手も不足し、金にも困り、時々病人の氣を損ずることもある。それで病人もうすうすう色々な事情にも氣がついていくように寝ていても樂でない。そこへ病氣はいつ治るかわからぬ。そこで本人も、兄の様に年若くして、その悲しき後を退る運命をたどるのかと、何時も／＼煩悶懊惱（ほうもんゐごう）（おう）して居るらしい。

○
私は病人の部屋へ入った。この青年とは幼少の頃から遊んだ仲である。

「お病氣はどうですか」
「お見舞下されて、ありがとう……。私は駄目です。どうせ治らぬものなら、いっそ早く死にたい……」

人だって、死んだらよいだろうと、口にこそ出さんが心では思っているのでしょう。それが家の者も人目があり自分も世間があるから、思い切ってそれがやれないのです。そればかりに／＼／＼しているのです」
これはなかなか思いつめた告白である。このままにして置けば、ヒョットすると、どんなことにもなりかねないと思うた。

「そう思うのも、全く無理がありません。人間はあなたの様になったら、そう思うでしょう……。苦しいでしょうなあ……」

○
火鉢にかけた鉄瓶の湯がたぎっている。庭では赤い柿がみのっている。竹に雀が轉っている。一羽は石燈籠に下りた。もう秋だ、これからだんだん寒くなる。病人は

「アー、アー、……」
とため息をつく。

そこで一旦私は室の外へ出て、家人に信仰談をこれ以上すすめても病氣にさわりがないかと聞いて見た。家人は

「どうか、思いきって、何でも云うてやって下さい。実は医師も見切りをつけて居るくらいなんですから。それで、私共も何か云うてやりたいが、言うことが出来ないで困っているのです。幸です、おたのみします」

「そうですか、それは大分あなたも落胆し過ぎているのではないですか……。しかしあなたの身になって見ればそうでしょう、いかにもそうでしょう。それはまことに無理もない。誰も長病になれば、そう思うでしょう。しかし人間の寿命はだれもわからないのですから、氣を落さないで養生なさい」
と慰めれば
「それが駄目なんです。兄もそうでしたが、それによく似ているのです。治る見込みのない者が生きているのは無駄ですよ。人にばかり迷惑をかけて何にもなりません。そして毎日々々くり返しまき返し考えては苦しんでいるのです。とてもやり切れません……」
親や人目がなければ……。ズット前に……」
と言葉を吞んだ。

「毎日、只、苦しむばかりで、何の希望もない者が、それでも生きていなければならんのでしょうか。」

と真剣である

○
それからまた病室に帰る。他には誰も居ない。

「どうです」

ときり出せば

「頭が痛い、手が重い」

と。私は枕元に正座してしばらく黙然……。

「前途に洋々たる希望にみちて、中学を卒業し、高等學校に入り、これからという場合になって、病氣で急に學校を休んで帰郷し、病床に涙をしぼるとはいかにも悲しいことでしょう」

と慰めれば、涙ながらに青年は語り出した。

「私は學校に居る時、少々哲學の書などを読みましたはまだよく領解出来ないうちにこんな病氣になってしまった。人生不可解と云うが、研究し尽くさぬうちにこの身が死ぬかも知れぬ。それでは間に合わぬ。何も分からぬまま死んで行くのか、それも死んだ先も見きわめぬのに。アア、大いに成功しようと思うたが、學業も終わらぬうちに倒れてしまった。

色は匂えど散るかも知れぬ。無常迅速というが先日よりも元氣だった若い青年がコロリと死んだ。今度は……私の番だかとも思う。」

お祖母さんからお念仏の話を聞き、広大のお力にすがって人生における出世の道をひらき、大いに仕事をやろうと思うて来ました。大いに働かんがために聞いて来ましたが、又お念仏申して、病中でも自分が安心し、父親も兄も死んだのですから、せめてお祖母さんや、お母さんに、優しい言葉でもかけて孝養をつくし、弟達を育ててやろうと願って来ました。

又信仰によって人格を磨き、名を立てようと思いました……だが恥かしながら、心には不平、不安ばかり、人に親切などが出来る私でないことが分かりました。人格もすこしも高くなりません、ますます下劣。何事も分らず何も出来ないうちに自分が死んで行かねばならぬとは、まことにつまらぬ、味気ない一生です……。

お念仏は口では申しているが、心の中ではチットも安心が出来ません……。

私はもう何もわかりません。何の望みもありません。何時死ぬかわからぬ、この病身では、いかなる高尚な、立派なる、深遠な学問や教を聞かされても、それを良く味わう気力も暇もありません。書物を読むのも疲れていやです、話するのも大儀です。

アア、もう何も彼も駄目です……。

と、ポツリ、ポツリと話しては、外の雀をうらやましそう

うか。

こちらの室で苦しんで、腹を立てて、喧嘩をしていた者が、その気持を解決せず、平和な気持を取り戻すことが出来ず、そのまま立腹して、苦しんで、怒った心そのままに向うの室へ行ったらとて、失張り苦しいのでないでしょうか。そう思いませんか」

すると突然その病人は、ムクムクと病床から這い出した。

「そうすれば、一体どうすればよいのでしょうか」

と云うなり、室のまわりをぐるぐる廻り出した。

私はそこで

「行くも死、止まるも死、帰るも亦死。人生無常です。

しかも生きて解決せずんば、死してなお苦悩続きます。

生死流転……。永劫の輪廻(りんね)……。我々凡夫

はどうすることも出来ません。我々からすれば、どうする方法もないのです、泣くだけです、狂うだけです。

我々は損得で生きているのではない、価値の有無で生きているのでもない。我々は自分の宿業で生きているのですだから生きたくても死なねばならず、又死にたくとも生きて苦しまなければならぬ。

自分の造った宿業のために、自分勝手に死ぬ事も出来ず生きることも出来ず、苦しみもたえている。それを気の毒だと察して下さる人があるのです、しかも、いかに気

に眺めている。

「柿が赤いね。つやがあって、おいしそうだ。風に竹の葉がゆれている。もう一度戸外に出て、世の中の空気を思う存分呼吸して、気持ちよい汗をかいて見たい。もうそれも出来ない……。私は一体どうなるのでしょうか、どうすればよいんでしょう……。

生きているのがつらい……。

いかに偉い人が人生を解決したとは言え、それはその偉い人だけの事で、自分にはその力がない、智慧もない。

アア、自分の様なつまらぬ人間には、いくらよい事を聞いても、教えられても、それが出来ない者には、何の役にも立たぬ……。

といかにもしょんぼりとしている。お湯がたぎっている。次第に日が暮れかかって来る。赤蜻蛉の飛ぶのもだんだん見えなくなる……。

そこで問うてみた。

「あなたは死にたいと云うが、死んだとて楽になるでしょうか。死ということは、この明るい室から、敷居をまたいで襖をあけて、向うの暗い室へ行くようなものでないでしょうか。こちらの室が明るい生の世界、死の敷居をまたいで闇の向うの室へ行くようなものでないでしょう

狂いの所業をやるうが、それを見て笑うどころか、馬鹿にするどころか、共に苦しかりうとかなしみ、共に泣いて、どこまでも一緒になってお呆れ下さらぬのです。

馬鹿なら馬鹿な程、呆れず、悪心起せば起こす程あれみどこまでも悪く思わず、どこまでも相手になって見捨てず、ついて離れたまわぬのです。

宿業のため一分一厘動けぬ我々なればこそ、そのあなたやわたしを助けんという誓いを立てて下されたのです。

「我、貧窮の衆生を救わずんば正覚を取らじ」とは如来の誓願です。

その如来は、今現在に、正に説法してござるのです。親鸞聖人はいつも「弥陀仏の誓願はひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身をたすけんと思召し立ちたまう本願のかたじけなさよ」と口ぐせのように申されたとのことです。

又「一人居て喜ばば二人と思ふべし、二人居て喜ばば三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」とも仰せられました。

遠慮はいらぬ、狂いなさい、泣きなさい、さわきなさい生きようか、死のうが、狂おうが。それは皆あなたの宿業のためです。だれもとめることは出来ませんし、誰もさせることも出来ません。

人間は宿業のもよおすところ、色々の苦しみをうけます
いろいろの煩悶を起こします。然し阿弥陀仏は、それを
かねて知悉されて、煩惱具足の凡夫と仰せられたること
であるから、悪るからんにつけてもいよいよお見捨ての
ない御真実をいただきます。よう。
又、思いもかけぬことから、罪業をおかして念仏も申さ
ないままに命終しようとも、速に仏力をもって往生させ
て下さるのです、老少善悪の人をおえらびにならぬ、限
りない大悲、おへだてない御真実に乗托して、浄土への
旅を続けましょう……」

……………。……………。言葉もない、丁寧に頭
を下げて念仏した。

(昭和三十年三月二十一日)



念 仏 詩 抄

わたしのための

わたしのための
五劫の御思惟
わたしのための
永劫の御修行
わたしのための
ナムアミダブツ

ナムと聞いたら
五劫の御思惟
アミダと聞いたら
永劫の御修行
思わじやおれぬ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

徒 然 草 (九段)

まことに愛著の道、その根ふかく源とおし。六塵（じ
ん）の楽欲（ぎようよく）おおしといえども、皆厭離（えんり）しつ
べし。その中に、ただかのまどいのひとつやめがたきのみ
ぞ、老いたるもわかきも、智あるも愚かなるも、かわると
ころなしとみゆる。

全 上 (十三段)

ひとりとしびのもとに文をひろげて、見ぬ世の人を、
友とするぞ、こよなうなくさむわざなる。

全 上 (五十九段)

大事を思いたたん人は、去りがたく、心にかからん事の
ほいを遂げずして、さながら捨つべきなり。……。
ちかき火などに逃ぐる人は、しばしとやいう。身をたす
けんとすれば、はじをもちえりみず、財をもすてのがれ
ざるぞかし。命は人をまつものかは。無常の来る事は、水
火のせむるより速かに、逃れがたきものを、その時、老い
たる親、いとけなき子、君の恩、人の情、捨てがたしとて
すてざらんや。

源 信 僧 都 詠

月花のなさけもはてはあらばこそ 常なき世にはこころと
どむな

木 村 無 相

あたえてぞ

御和讃に
“弥陀の名号あたえてぞ
恒沙の諸仏すすめたる”

ナムアミダブツを
まずおあたえ
カラ念仏も
ミダのおあたえ
自力念仏も
ミダのおあたえ
おあたえのアト
今のおすすめ
イワレ聞けよと
今のおすすめ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

如来とひとし

〃信心よろこぶそのひとを

如来にひとしときたもう

大信心は仏性なり

仏性すなわち如来なり〃

如来の仰せを

いただきて

ナムアミダブツ

信すれば

如来とひとしと

ほめたもう

ああ

この不思議

この不思議

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツの

おん声が

胸にひびいて

ナムアミダブツ

称うるまに

おん聞かせ

助くるぞよと

おん聞かせ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

名号の弥陀

弥陀の本願

成就して

名号の弥陀と

なりたもう

ああ

今ここに

ナムアミダ

胸にひびきて

呼びたもう

名号の弥陀

呼びたもう

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

わたしの胸に

如来は西と

聞きしかど

ああ

今ここに

ナムアミダ

わたしの胸に

呼びたもう

み名とあらわれ

呼びたもう

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ちか道

念仏もうすが

ちか道じゃ

〃称我名字と願じつつ

若生者と誓いたり〃

如来の願の

ナムアミダブツ

もうすまんまが

ちか道じゃ

今のお声の

ナムアミダブツ

若生者の

おん誓い――

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

如来大悲

親鸞聖人ご和讃に

〃信心のひとにおとらじと

信心自力の行者も

如来大悲の恩を知り

称名念仏はげむべし〃

信心自力のわれらにも

あらわれたもう御尊号

如来大悲の御尊号

ああありがたや御尊号

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ただ念仏のたのもしさ

花 田 正 夫

池山先生の晩年、大病後に大谷大学も辞められて御静養の頃、蓮華谷のお宅に伺いました。話がしばらくとぎれて先生のお口からお念仏がもれておりましたが、ふと、

「ただ念仏のたのもしさをみんなに聞いてもらいたい、

もし身体がよくなったら……」

とつぶやかれました、私は思わずオームがえしに

「もしそう出来ます日が参りましたら、先生のお伴をしてまいりましょう」

と申しました。先日、歎異抄の第七章の念仏者は無碍の一道のところを読み、先生のお歌

たのまるるただ念仏のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ

惨怛たる悔いの残せし一一の

あとかたもなき無碍の一道

を思い浮かべて心に誦しております時、かつて先生におきされたことを新らしく思い出しました。それと私の歩み

は現在も先生のお伴をして、ただ念仏のたのもしさを皆さんと共に味わい続けているだけだなあ！とかえりみさせられました。

それにつけても親鸞聖人は、二十九歳の御時、叡山での二十年間の修学修行もむなし、いずれの行もおおよび難き身と山を下られ、幸によき師法然上人におあいになつて「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

と聞きとられ、「他力の悲願は煩惱具足の身、いずれの行にても生死を離ることあるべからざる、かくの如き我等がためなりけり」「さればそくばくの業をもちける親鸞一人がためなりけり」と、直ちに本願念仏に開眼せられ、爾来、九十で御往生の日まで「ただ念仏」一つであらゆる業報を越え越えて来られまして、そこに

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念

仏のみぞまことにておわします」

と、ただ念仏のまことを信証されました。煩惱具足の凡夫が火宅無常の世に処して織りなすあらゆる言動は、何一つとして虚仮不実の域から出られないのに、その虚仮を転じて真実にかして下さるのは、ただ念仏のまことのはたらきであったとの、慚愧と感謝の御述懐でありました。聖人の御一生はただ念仏に、夜明けされ、ただ念仏ひとつに貫ぬかれて、至徳の風静かに、衆禍の波転ずる白道の旅でありました。

法然上人も、十五歳で叡山に登り、四十三歳に、十惡愚痴の身として闇夜に彷徨された時、幸に宿善ここに熟して、善導大師の「一心専念弥陀名号……順彼仏願故」の一文で開眼され、八十御入滅の日まであらゆる困難を越えて浄土門を開かれましたが、御臨末の近い日、御弟子が、古来の先徳方はのこらず廟所を持っていられますが、上人の御跡はどこに定めましょうかと、お尋ねした時、

「あとを一廟にしむれば、遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に遍満すべし。念仏の興行は愚老一期の勸化なり。されば、念仏を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人、漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし」と遺言せられました。そこに御弟子方は、お念仏がうかぶ

につけ恩師上人が何時でも何処でも御一緒して下さることをありがたく、且つはたのもしく仰いだことでありましよう。更に法然上人御自身が平素くりかえして

「念仏の草庵せましといえども恒沙の聖衆雲集し菴羅園（あんらえん）の華座（維摩方丈の室）に同じ、三昧（さんまい）の道場せましといえども無數の聖賢側塞す靈鷲山の菩提のごとし」

と、冥衆の護持と諸仏の護念と称讃を随喜せられました。

法然上人と親鸞聖人のお二人は、ただ念仏で信眼がひらけ、ただ念仏一つで虚仮の世を真実に転成されるたのもしさを身をもって信証して下さり、その道一つをお勧め下さったのでありますが、私共の身近かにその道一つをおたどり下さった白井先生と池山先生のことを誌しましょう。

昨年八月お亡くなりになりました白井成允先生が、最後の御病床で、長女の明子様に

「人生は限りなく淋しい、はかなく無常である」と末期の御目に映じる人生のはかなさを述べられ

「明子も今後の生を念仏の中に生きて下さい。」

念仏しているうちにかならず途は開けてくるのですから……」

と語られ、また御遺文には

「いつ、どこでも、もし父のことを思い出すことがあったら、南無阿弥陀仏と唱えて下さい。」

念仏の中に私は生き続けているのですから」とありました由であります。これも念仏の開眼せられた先生御自身が業報の荒野をお念仏申し申しすごされた八十五年の信仰生活の至極の味わいを、生死巖頭に立たれて明子様に手渡しされた尊いお言葉でありました。

池山先生がお亡くなりになってもう三十六年すぎましたが、先生がいよいよ死を自覚せられた時、友子奥様に「生きたくても命がないじゃしょうがない……ナムアミダブツ、々々々。可哀想にととうとお前も一人になるんだな……。アア可哀想に。しかしこれで別れきりじゃないんだよ、そのうちにまたあえるからな……」

とお別れを悲しまれる奥様に語られ、更に力強く

「しつかり念仏するんだ、しつかり念仏するんだ、どこまでも念仏でつながっているんだよ、いいかナムアミダブツ、々々々」

とただ念仏のたのもしさ、俱会一処の道を指差されました十一月八日に亡くなれましたが、十月二十九日に、末娘の愛子さまに

「お父さんさえ居ればお前は満足してくれたが、今度は生きてやれなくなつた。」

愛子、お念仏を云え！……」

愛子さんは、ここで念仏申さないとお父様と永遠に別れねばならぬと思い、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと申されると、

「愛子が念仏申してくれた、もう思い残すことはない、安心だ！お父さんは喜ぶ、母さんも、さきに亡くなった母さんもね。」

お父さんともう離れることはない、これから念仏を味わって行けばいいんだ！」と非常な喜びと満足の中からも、便箋と万年筆をもとめられて、

「南無阿弥陀仏を云え」

と書きとらせられて、御自身にも

「南無阿弥陀仏アイ子」

と書き添えられました。

十月三十一日の夕刻、舌の自由も失いかけられた時、

「何も残るものはない、何も残るものはない。」

ただ念仏だけが残ってくれる。ただ念仏だけが残ってくれる、偉いこつたよ、ありがたいこつたよ」と

と微笑みを浮かべられて述懐せられ、これがこの世でのま

とまったお言葉の最後となりました。

先生の御一生も、四十二歳に大疑団に逢着せられて、にっちもさっちも行かなくなつた刹那に「親鸞におきてはただ念仏して……」の歎異抄の聖人の仰せに心がひらけ、爾来六十七歳まで常念仏の人としてすごされ、ただ念仏のおまことを信証されて、そのたのもしさを私共にくりかえしまきかえしお知らせ下さったのであります。

× × × × × × ×

「たのもしさ、とは本願を信じ念仏申す者の上にあらわれる余韻である」とある時、お聞きしたことがあります。

「よろこびは出たりひっこんだり浮動するが、たのもしさは一度信証されると消えることはない、信仰生活の始終を貫ぬくものである」とも話して下さいました。

「ただ念仏」のた、とは、唯信鈔文意に聖人が示されましたように「唯」というのは、そのことひとつ、ふたつならぶことをきらうなり」とのところであります。池山先生が「ただ念仏だけなんだよ、それだけでよい」と仰言ったのも信の旅でくりかえしうなずかれたことでありましょう。また大病（急性腎臓炎）で御病臥中に、死の横顔を見られながら「今臨終という時に、何か心得ておかねばならぬと註文があったらたまったものではない、ただ念仏一つでおたすけ下さることがありがたい」と述べられました。

但し、「ただ念仏のた、に、御師匠が道の至極を渡す巻物一卷のこころと、他の爽雜物をより分ける飾（ふるい）の意味がある、歎異抄の二条のただ念仏してには前者、総結文のただ念仏のみぞまことのただ念仏は後者である」とも加えられました。

私は或時、この「唯」について正信偈に目を通し、聖人が度々大切なところで繰り返されているのに驚きました。如来世に興出したまう所以は、唯、弥陀の本願海を説かんとなり。

唯能く常に如来の号（みな）を称して、大悲弘誓の恩を報ずべし。

往還の廻向は他力に由る、正定の因は唯信心なり。

道緯は聖道の証し難きことを決し、唯浄土の通入すべきことを明す

極重の悪人は唯仏を称すべし

道俗時衆共に同心に、唯この高僧の説を信ずべし
更に教行信証の総序の文に

穢を捨て浄をねがい、行に迷い信に惑い、心昏（くら）く識（さと）りすくなく、悪重く障り多きもの、特に如来の發遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行につかえ、唯この信をあがめよ。

と切々とした悲心からお勧め下さるのであります。

最後に「たのもしさ」については歎異抄の第九章を直ぐ憶うのであります。

唯田房が聖人から本願のまことを聞いて非常に感動しましたが、その後歳月が経つにつれてその喜び心が微温的になって、そのことを苦にして色々とはからつてみても従前のような喜びがおこらず、又浄土のさとりが近づくのにそれもないしめない自分を持てあまして聖人に申し上げた時「親鸞もそうした不審があったが唯田も同じであるなあ」と、唯田の心に同じて下さって「よろこぶべき心をおさえているのは煩惱のためであるが、仏はかねてからそれを知り尽くして下さっているのであるから、この深い御恵みも喜べぬわたし共のための本願であつたと知らされて、いよいよたのもしきことである。また浄土が近づくこともたのもしめない、執着の強いわたし共をことに憐れんで下さるのであるから、大悲大願はいよいよたのもしき往生も間違いないと頂けるではないか」とのお答えでありました。

ここに、煩惱具足、煩惱興盛の者をすでによく知り抜かれての上の本願のたのもしさを知らされるのであります。私共のすむ世界の鉄則は、賢い者、善良な者には力になって下さる人々が多いのですが、愚者悪人は見捨てられるのであります。それですから、悪いところ、自分の欠点は出

ともしび 聚墨生

仏法は身をすててのぞきもとむる心より信をば得ることなり
(蓮如上人聞書)

仏法を求めるのに商売繁盛、家内安全、病氣恢復といったものから、修養道德、教養知識を身につけたい等々の願いが主になり勝ちであるが、それは身を捨てて求める心ではない。むしろ仏法を手段として世間の欲望を満足しようとする心であるが、煩惱具足の身には、よしんばそれがかなったとしても迷いの境界をまぬかれられない。

芭蕉翁は「花のことは花に習え」と戒め、良寛さんは「手元を見ずに手本だけ見て書を習え」と教えている。仏道を学ぶにも、自分の善悪、智愚にとらえられず、仏の我等にそがれる大悲の本願を仰いで、浮くも沈むも身にもつ業報にまかせる時、仏願力の自然のはたらきとして煩惱の泥田に信心の蓮華が香り、仏果の実も結ばれる。石臼の軸は一本に限る、二本あると動かなくなる。仏願一つで人生百年も光り悠々である。

四十八年十二月三十一日

大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば至徳の風静かにして衆禍の波転ず (教行信証)

徳富蘆花が瀬戸内海の浜辺に立って「人の子が貝掘りあらす砂原を平(たいら)になして潮の寄せ来ふ」と詠じて

来るだけ包みかくして知られぬように細心の注意をしていなければなりません。それにくらべて生みの親は子の欠点短所をよく知って、そこを護り、苦にして下さるから、親の膝下では身心共にくつろぎ安んじることが出来るのであります。久遠の母親、み仏を知らされる時、たのもしさを恵まれるのであります。

ある秋の日池山先生をおたずねした時、

仰向けに子犬ねころぶ日向かな

の句を示されて「秋陽のさす午后、椅子を出して庭で新聞を読んでいたが、はじめ頃足元でしきりにジャレていた子犬が急にしずかになったので、何処かへ行ったのかと下を見ると、足元で仰向けになってねころんでいた。犬は仰向けには仲々ねるものではない、警戒心を持っていてすぐ走れるようにしているのに、子犬にしてみれば、心地よい秋陽は照りつけるし、どんな敵をも護ってくれる主人がいるので、安心しきってゴロンと仰向けにねころんでいた。これが本願のたのもしさに大安心させて頂く様子と似ているのでこの句を作った」と説明されました。

以上、「ただ念仏のたのもしさ」の一句の中に、歎異抄の二章と九章と総結文のすべてがとけておさまっているのに気付かされ、万人にここ一つを頒ちたいとの先生の切な、そして絶えぬ願心に襟を正さしめられました。

いる。池山先生は「惨怛たる悔いの残せし一一の跡かたもなき無碍の一道」と仏の無碍光を讃えられた。

さて古稀になって、私の生涯を省みる時、多くの人の心を傷つけ害して、我武者羅に突っ走った跡を思うと全く惨怛たるものである。しかもそうした人の多くはすでに亡くなっておわびする術もない。この私に想い出されるのは、殺人強盗の罪で処刑された人が、念仏に甦生してお別れの時「この極悪人を浄土に迎えて成仏させて下さるとは何という有難いことでしょうか。この世では身から出た錆で、誰一人も相手にして貰えず、身一つ自由にならぬ私ですが成仏させて頂いた暁には存分に罪の償いをさせていただきます」と教務課長に言いのこして、念仏裡に往生した信境である。

私もまた死の宣告を受けた罪人であるが、幸にもこの身にそいで下さる大悲の潮によって、よるべき身のよるべ、光なき身に大きな燈火をいただくのである。

四十九年四月二十二日



あとがき

旧臘以来病床にすごされました福島先生から四月末に、「病氣漸く回復に向うという有様でありまして、まだきまった仕事は何となく物憂く感ぜられ、万葉集など少しづつ繙いて居ります。これは私の最近の拙作ですが

健かにまたなりかえる此の身なり望みを持ちて今日を過ぎ行くいつしかも春の半となりけり我が窓前の桜花咲く」

とおたより頂きました。本年は八十五歳になられました先生の御恢復を祈念しております。

× × × × × × ×

わが医学と求道 川畑 愛義

——人生最高の生き甲斐——

定価五百円、送料八十円。

京都市下京区堀川通花屋町、百華苑。

振替、京都二五七八八番、

右御紹介いたします。島得寿氏が読後感も書いていられます。「人形の家」の主人公が、「妻であり、母である前に人間でありたい」という名言を残しましたが、仏

道もこの素裸の人間としての真の生き甲斐を与えられるので、その上から、医学なり政治、教育、実業と夫々の業道に随順して生き、浄土への旅を続けさせて頂くのであります。かつて「自分は寺に生れながら信も得られずに居り、僧侶として困っております」と云って来られた人がありました「それなら僧侶をやめなさい、困ることはないでしょう。聖人の教えは、人間である限りそれなくては真暗であり生きること死ぬることも出来ぬもので、僧分だからいるというようなものでないでしょう」と語り合ったことがあります。川畑さんが、そうした地盤に立って、医師として保健衛生の道を進んでいられ、その身辺におこる事象を念仏で越えて行かれたことが根本になっている書であります。

× × × × × × ×

「慈光の誌代を六月から一年千円（送料共）にさせて頂きました。但し既にお入金下さっている誌代はそのまま据えおきにしますが、今後頂きますものについて値上げさせて頂きます、よろしく御了承下さい。

罪障り功德の体となしたまう御名こそおのがいのちなりけり。 足利浄円師

△御案内▽

○一道会例会。毎月 第一、二、三日曜、午後一時半。 南区駈上町二の八八一道会館
 ※市バス、新郊通一丁目下車、東入る三筋目、左入る二軒目。
 ※地下鉄、新瑞橋終点下車、徒歩十五分。
 ※名鉄、呼続下車、徒歩二十分。
 ○教西寺法話会。毎月廿四日、午前午後。昭和区小桜町二丁目四番地。
 ※市バス、御器所通り下車。
 ※柴町より、枳中（いりなか）行き、北山、下車。
 ※名駅より ⑦妙見町行き、御器所通り下車。

定価		半年		一年		五〇〇円（送共）	
一年		一〇〇〇円（送共）					
編集・発行人		名古屋市中区駈上町二ノ八八		花田 正夫			
印刷		愛知県西加茂郡三好町大字福谷		吉野 穂志郎			
発行所		名古屋市中区駈上町二ノ八八		慈光社			
振替口座		名古屋 一〇四七〇番		郵便番号		四五七	